

地方史研究者収集資料の意義

西 向 宏 介

【要旨】 自治体アーカイブズ機関（文書館・公文書館等）における収蔵資料のうち、思いのほか利用が多い地方史研究者の収集資料に注目し、広島県立文書館の収蔵資料の中からいくつかの事例を紹介しつつ、その意義を考察する。

はじめに—本稿の問題関心—

- 1 地方史研究者収集資料の事例 —広島県立文書館の収蔵資料から—
 - 1-1 青木茂氏旧蔵文書
 - 1-2 小都勇二資料
- 2 鉄道史家・長船友則氏とその資料
 - 2-1 鉄道史家・長船友則氏
 - 2-2 長船友則氏収集資料の受入れと資料の概要
 - 2-3 資料収集と整理術
- 3 歴史記録者としての地方史研究者
自治体アーカイブズ機関に求められる資料 —むすびにかえて—

はじめに—本稿の問題関心—

公文書と地域資料を収蔵資料とする自治体アーカイブズ機関において、収蔵資料の利用状況について、どのような資料が頻繁に利用されているかを振り返ったとき、意外にも個人の収集資料の利用が多いことに気づかされる。“意外”と記したのは、一般的に自治体のアーカイブズ機関において、中核となる収蔵資料は公文書と地域資料であり、地域資料の中でもとくに重視されるのは村役人などの家文書だからである。個人の収集資料は、言わばアーカイブズ機関の収蔵資料としては支流に属するものと見なされがちである。しかし、何故個人の収集資料が多く利用されるのかを問うことは、必然的に自治体アーカイブズ機関にとって何が必要な資料なのかを問うことにもつながる。

本稿はそのような問題関心から、個人の収集資料に焦点を当て、その意義

を考察するものである¹。ただし、ここで個人の収集資料と言う場合、どんな個人でも良いというわけではない。利用状況に鑑みてとくに注目するのは、郷土史家や地域に密着して歴史を著述する地方史研究者が収集した資料である。もちろん、全ての地方史研究者の資料が一樣に多くの利用を得るというものではないが、とくに利用頻度の高い資料を収集する研究者には、その研究者個人（収集者）の地方・地域への愛着と歴史叙述のための資料収集への執着という点で、ある種の共通性が存在するように思われる。

本稿では、こうした地方史研究者の収集資料について、広島県立文書館の収蔵資料の事例（青木茂氏旧蔵文書と小都勇二資料）を紹介する。そして、さらに具体的な文書群の事例として、鉄道史家である長船友則氏の収集資料を取り上げ、その概要と収集・整理方法の特徴を紹介する。その上で、地方史研究者（収集者）としての生き方や考え方に着目することにより、そこに通底する地方史研究者（収集者）の姿勢が、収集資料の資料的価値の高さにもつながっていることを示し、さらに自治体アーカイブズ機関に求められる資料とは何かについて、言及していくことにする²。

1 地方史研究者収集資料の事例—広島県立文書館の収蔵資料から—

1-1 青木茂氏旧蔵文書

青木茂氏（1898-1984）は、御調郡三浦村（現尾道市因島椋浦町）出身の社会経済史研究者であり、『尾道市史』（昭和14～15（1939～40）年）や『因島市史』（昭和43（1968）年）・『新修尾道市史』（昭和46～52（1971～77）年）の執筆者として知られる。

戦前は『山陽日報』とその後身の『山陽日日新聞』などの記者・主筆として活動し、戦後は金光教教学研究部嘱託や尾道市立女子専門学校講師、及び同

¹ 個人文書や個人の収集資料について取り上げた研究は各所で見受けるが、自治体アーカイブズ機関が収蔵するものについて自治体アーカイブズ機関の側から論じた研究は、管見の限り見当たらない。本稿では、主たる利用者である住民にとって求められるアーカイブズとは何か、という観点から、個人（地方史研究者）の収集資料の意義を考察する。

² 本稿に関連するものとして、広島県立文書館が平成26年（2014）度実施した収蔵文書の紹介展図録『郷土史研究家・収集家たちの遺した資料』（2014、広島県立文書館、担当：長沢洋）がある。

校の後身である尾道短期大学の助教授・教授となった³。短大在勤中には富籤の研究をまとめ⁴、退職後には、郷里の因島市からの懇請を受けて『因島市史』の執筆に従事した。次いで、神戸学院大学経済学部長からの懇請を受けて、同大学の日本経済史担当教授となった後には、『新修尾道市史』の編さん・執筆の仕事に携わった。市史の仕事が多忙になると、同大学を辞して市史の仕事に専念し、全6巻の市史執筆を完遂した。昭和38年（1963）度には、長年の地方史研究の業績が評価され、中国新聞社から中国文化賞を受賞。さらに、昭和54年（1979）には山陽新聞賞も受賞した。

青木氏が所蔵していた図書・古文書・ノート・メモ類などの関係資料は、同氏の没後、昭和61年（1986）に一括して岡山県浅口市金光町の金光図書館へ寄贈された。青木氏と金光教及び金光図書館との関わりは深く、金光教の教祖に関する著書を有するほか、教祖赤沢文治の学問的師匠であった備中国浅口郡大谷村庄屋小野家の文書を研究し、小野家の出自や思想、教祖との関わり等について『金光教学』などにいくつもの論考を掲載している。

その後、平成12年（2000）7月に、古文書類については、遺族の了解のもと、同館から広島県立文書館へ寄贈された。従って、青木茂氏の関係資料は、金光図書館が所蔵する図書や自筆資料等と広島県立文書館が所蔵する古文書とに分かれており、青木氏の個人文書を考える際には、本来的には、両館の資料を一体化したものとして考える必要があるが、ここでは広島県立文書館所蔵の古文書に限定して、その資料的意義を考察する⁵。

広島県立文書館所蔵の青木茂氏旧蔵文書は、総点数1880点（304冊・89綴・52括・1435点）であり、これらは、青木氏が自身の郷土史研究や市史編さんの過程で旧家や古紙回収業者などから収集してきたものである。文書群の内容を見ると、この中には、尾道一の豪商である「灰屋」（橋本家）をはじめ、東屋（天野家）・油屋（亀山家）・住屋（島居家）といった複数の商家文書が含まれていると考えられる。

そのうち、とくに注目されるのは、何といても尾道町年寄が書き継いで

³ 『市史広報』第6号（2020、尾道市史編さん委員会事務局）

⁴ 青木茂『近世日本における富籤の社会経済史的研究』（1962、増田兄弟活版社、童心房（発売））。

⁵ 金光図書館が所蔵する「青木茂文庫」については、前掲注3の『市史広報』第6号及び林良司「金光図書館と青木茂文庫」（『尾道文化』39号、2021）で紹介されている。

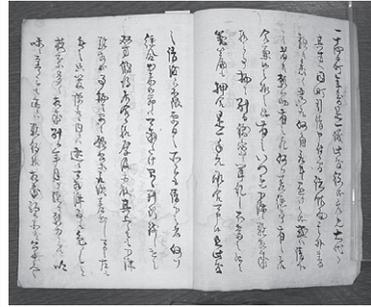


写真1 「尾道町年誌」

きた尾道町の公用記録「尾道町年誌」(写真1)である⁶。近世の尾道町は土堂町・十四日町・久保町の三町から成り、それぞれに1名の町年寄が置かれた。「尾道町年誌」⁷は、このうち十四日町の町年寄が記したものが大半を占め、「拾四日町役方年誌」などと表題が記されているものが多い。これらは、裏表紙に記載された作成者がまちまちであることから、歴代の町年寄が記録してきたものが後任の町年寄へと引き継がれ、最終的に、幕末に十四日町の町年寄であった橋本家へ引き継がれ、残ったものと考えられる。つまり、近世尾道町の公的記録であると言える。青木氏自身は、「この年誌は、代々の町年寄、市中の他の町年寄の年誌類が、上席町年寄である橋本吉兵衛のもとに、寄り集まってきたものの集合体」としている。いずれにしろ、最終的に橋本家のもとに残されたものを青木氏が同家より譲り受けたのが「尾道町年誌」である。広島県立文書館が所蔵する年誌は74冊あり、他に「諸控」5冊、「寺社町方諸願」など類似のものが15冊、さらに「年誌通覧抜粹」4冊がある⁸。

この年誌の資料的意義は、港町尾道の歴史を研究する者であれば誰もが認

⁶ 「尾道町年誌」については『広島県立文書館だより』第19号(2002)でも紹介している。

⁷ 青木氏は、これら年誌帳を橋本家から譲り受けたことから「橋本年誌」と称しているが、実際には歴代の町年寄が記してきた記録であることから、広島県立文書館では「尾道町年誌」と称している。

⁸ 青木氏は『新修尾道市史』第6巻における「橋本年誌」の説明の中で、年誌81冊、宝永高改帳8冊、計89冊と記している。宝永高改帳8冊は広島県立文書館所蔵の青木茂氏旧蔵文書の中に確認できるが、年誌の冊数については、表題に「年誌」と明記してあるものと、表題は異なるが明らかに年誌と同等のものに分かる「諸控」を合わせても79冊である。実際、『新修尾道市史』で翻刻紹介されている年誌の中には、広島県立文書館所蔵分には無いものがある。

める第一級の歴史資料である。現在でも、近世の尾道町を調査研究する利用者のほとんどがこの資料を利用する。青木氏が「橋本年誌」と称するこの年誌を入手した経緯について、青木氏は昭和15年（1940）刊行の旧版『尾道市史』に次のように記している。

橋本年誌は、市史刊行の完成年度を目の前にひかえた、昭和一四年三月、橋本龍一氏が尾道十四日町の倉庫を、都市計画事業のさい取り払われるさい出てきたものを、寄贈して下さったものである。この資料は、同家に所蔵されているはずだと予想して、かねて披見させて頂くことを頼んでいたものであるが、なかなか実現の運びに至らなかったものを、今のような事情から、実在が明らかになったもので、一件書類をまとめて、ごっそりわたしに寄与されたものである⁹。

青木氏はすでに戦前・戦中期から、金光教との関わりで様々な論考・著書を執筆する傍ら、富籤をはじめとする尾道の地方史研究の成果も発表しており、その過程で尾道町内の古文書の調査・収集を行っていたと思われる。その中で、とくに注視して探し求めたのが「尾道町年誌」であった。

そんな青木氏が、生涯をかけて取り組んだのが尾道市史の編さんであった。旧版の『尾道市史』全3巻（上・中・下巻）と『新修尾道市史』全6巻（第1～6巻）の執筆を全て青木氏が手がけた。しかし、旧版の市史では、戦時期における軍部の圧力と厳しい検閲を受け、当初全4巻の予定であったものが、事業中止を命じられ、全3巻に圧縮せざるを得なくなった。橋本家から年誌を入手したのは、旧版の市史編さんの終末期であったが、青木氏は急遽予定を変更して最後の3巻目を資料編とし、年誌を収録することにしたのである。

軍部からの編纂中止命令で、事業中止を余儀なくされてはいたが、急に予定を変更して、八〇〇余ページにわたる一卷を、資料編として、橋本年誌と問屋年誌の掲載にあてたのであった。これは空襲（第二次大戦）の最中のこととて、活字にして各方面に散布しておきさえすれば、たとい原典が焼失しても、どこかに記録として残るであろうことを考えて、編集の体裁とし

⁹ 『新修尾道市史』第6巻（1977、尾道市役所）401頁。

では拙いやりかたではあったが、刊行しておいたわけである¹⁰。

青木氏としては、年誌の全文を掲載したいところであったが、それは到底不可能であった。しかし、「幸いに専門的学者から好評を得たことは、敢えて予期して決意したことであったが、わたしの執念の的がはずれていなかったことに自ら慰めを覚えたことであった」と述べるように、戦時期に刊行されたこの市史は、高い評価を得たのである。

その後、旧版の市史から30年を経て、再び市史編さん事業が行われることとなった。当時の経緯について、尾道市出身で一橋大学名誉教授であった高垣寅次郎¹¹が記している。当時の尾道市長松谷勝が高垣の自宅を訪問し、尾道の市制70周年記念事業として市史を刊行することについて相談した際、高垣は「私見としては、旧市史を手がけ、軍部との間で苦勞してきた青木茂君に、再起を求めてはどうか。(中略)同君ならば資料も豊富に集めている。尾道在住四〇年間、ただ一^{ママ}函に尾道と取り組んできた執拗さにも敬服する。戦後、学会誌にその探求を纏め、追究しながら発表した論文もだいたい私は眼を通して。」と、青木氏を推薦し、松谷市長もその提言を受け入れたという。青木氏は尾道市嘱託として、『新修尾道市史』の編さんの任を負うことになったのである。

高垣が期待した通り、青木氏は市史編さんに打ち込んでいくが、そこで核にした資料は、やはり「尾道町年誌」であった。『新修尾道市史』では、各巻に年誌の翻刻文が紹介されており、最後の第6巻では、再び資料編として、「橋本年誌」「栗田年誌」「問屋年誌」「商業沿革資料」を掲載し、そのうち「橋本年誌」を226頁にわたって翻刻掲載した¹²。

¹⁰ 『新修尾道市史』第6巻、402頁。文中の「問屋年誌」は尾道商工会議所所蔵文書。

¹¹ 高垣寅次郎(1890-1985)は尾道市出身の経済学者。東京商業学校(後の一橋大学)の助教授を務めた後、石橋湛山らと金融学会を創立、長く会長を務めた。また、紅陵大学(現拓殖大学)総長・理事長、一橋大学名誉教授、成城大学学長、日本学術振興会理事長、日本ユネスコ国内委員会会長、財団法人ユネスコ・アジア文化センター理事長・会長などを歴任した。

¹² 青木氏によると、当初の予定では、『新修尾道市史』の第6巻は全頁を資料編に充てる予定であったが、5巻までに書き尽くせなかったテーマ(宗教・文化・学校・一般社会・人物)が残ったため、これらを第6巻に割り込ませるため、約850頁の半分まで資料編を圧縮せざるを得なかったという(『新修尾道市史』第5巻(1976、尾道市役所)あとがき)。

青木氏がこれほどまでに、年誌の翻刻掲載を重視したのは、近世尾道町の商業・経済の動きを克明に描写しようとする青木氏の問題関心からして、年誌が必須の資料であったからにはかならない。

港町尾道の商勢の輪廻をたどってみようとしても、残念なことに飛びついて紹介するほどの記録が残っていない。領主寄生の豪商も、その名こそ記録に残しているが、具体的な内容がさっぱりわからない。本書第二巻に紹介した橋本文書のような、また金屋文書のような、まとまった資料は皆無である。しかし、橋本文書や金屋文書のような商業規模は突如として湧き出るような形で出てくるものではない。必ずその裏には、長い連続した年輪があるはずである。それを探ってみるための唯一の資料は今のところ橋本年誌によるのほかに何もない¹³。

つまり、港町尾道の歴史的変遷について、橋本家文書や金屋（栗田家）文書など一部の豪商を除いては文書が残存しておらず、尾道町の商業・経済の具体的な動きについては、年誌をもってしか知る術がないとの認識である。

事実、最新刊の『新尾道市史』¹⁴においても、これら年誌は近世編の中核資料であることに変わりはなく、近世尾道町の歴史を描く上で、必要不可欠な資料であることは間違いない。

青木氏が収集していなければ、これらは散逸していたかもしれず、もし失われていたと仮定するならば、その後の尾道市史の編さん事業は困難を極めたはずであり、内容的にも相当貧弱なものにならざるを得ず、そもそも港町としての尾道町を描くことすら困難であったに違いない。年誌の収集と翻刻は、まさに青木氏の執念ともいうべき研究活動の所産であった。

青木氏は、『新修尾道市史』の執筆を任された時、すでに高齢かつ多病を心配されていたが、第5巻の執筆を終えた時には、すでに左眼を失明し、右眼も危うい状況で、口述筆記も考えたという。青木氏は『新修尾道市史』

¹³ 『新修尾道市史』第5巻、20頁。文中の「橋本文書」は、現在広島県立文書館が所蔵する橋本家文書（文書群番号198806）を指す。当時青木氏は、広島県立図書館が所蔵していた橋本家文書を市史の執筆にも使用しているが、享保10年「万本貸帳」などごく僅かなものしか使用していない。また、「金屋文書」は、尾道市立中央図書館が所蔵する金屋（栗田家）の文書群を指す。

¹⁴ 『新尾道市史』は平成28年（2016）度から開始した新市史の編さん事業。

全6巻を、まさに命を削って書き上げた。最後の第6巻のあとがきに、青木氏は主治医への感謝の言葉を述べ、編さん終了6年後の昭和58年(1983)に、86歳で逝去した。

1-2 小都勇二資料

小都勇二氏(1911~1999)は、高田郡吉田町(現安芸高田市吉田)の郷土史研究者である。高田郡及び吉田町の郷土史に関する様々な分野について数多くの著作をもち、とりわけ毛利元就及び郡山城跡に関して顕著な研究成果を挙げた。小都氏は、中国新聞社に昭和5年(1930)に入社。その一方で、同6年(1931)には吉田郷土史調査会を結成し、郷土史研究に打ち込んでいくこととなる。同調査会から高田郡及び吉田町の郷土史・文化財・民俗芸能等をテーマとして、枚挙に暇がないほど実に多くの著作を発表した。昭和26~35年(1951~1960)には、広島県史蹟名勝天然記念物調査員を委嘱されている。吉田支局長を務めた中国新聞社を昭和42年(1967)に退社した後は、吉田歴史資料館の初代館長となり(昭和46~55年(1971~1980))、また、新聞社を退社したのと時を同じくして高田郡史編纂委員長を委嘱され、郡史の編さん・執筆に従事していった。

小都氏の数々の著作の中でも、とりわけ注目されるのが、この『高田郡史』(昭和47~56年(1972~1981))である。地元の郷土史研究者である永井弥六氏の発案で始まったこの郡史は、小都氏が全4巻(上巻・下巻・民俗編・資料編)をほぼ一人で執筆した。永井弥六氏(1904~2000)もまた、高田郡の著名な郷土史家であり、昭和22年(1947)4月から43年(1968)10月まで高田郡三田村長と白木町長を務め、昭和27年(1952)1月以降は高田郡町村会長を務めた。その傍ら、『広島藩の農村』や『広島藩の庄屋』・『安芸国高田郡郷土史こぼればなし』・『わがふるさと三田』など、多数の著作を世に出し、戦後広島県地方史研究の先駆者であった。その永井氏をして、「他に及ぶところがない」と言わしめるほど、小都氏の郷土史研究の蓄積は高く評価されており、それゆえ永井氏は『高田郡史』の編さん・執筆を小都氏に委ね、小都氏もまた、懇意にする永井氏からの依頼を快諾したのである。

昭和53年(1978)には、文化庁から文化行政功労者表彰を受け、翌54年(1979)には中国文化賞を受賞、同60年(1985)には勲六等旭日賞を授与されている。

広島県立文書館所蔵の小都勇二資料は、小都氏が吉田町の旧宅裏の蔵で保存されていたものを、小都氏の25回忌を機に、御子息から広島県立文書館へ寄贈されたものである¹⁵。

ここで、小都勇二資料の概要を紹介しておくことにする。主なものとしては、高田郡・吉田町の戦前・戦後の地図や絵図・図面類のほか、小都氏による昭和戦前・戦中・戦後にわたる日誌、各種原稿・著作物、高田郡関係の古文書・絵葉書・教科書、吉田町会資料・行政資料、毛利氏関係郷土資料、高田郡・吉田町・ヒロシマ関係の新聞記事切抜などがあり、総数4928点(2945件)の資料である¹⁶。

中でもとくに注目されるのが、「高田郡日誌」と表題を付した日誌類である(写真2)。これらは原稿用紙に手書きで記した高田郡及び吉田町内の日々の記録で、1年ごとに綴じ糸で製本している。戦時期には「支那事変中吉田町記録」と表題を付した日誌を5冊程度に分けて製本し、自作の帙で包装している。新聞記事の切り抜きを適宜貼付しながら、吉田町の当時の状況を日記として詳細に記した貴重な記録である。



写真2 「高田郡日誌」

また、新聞記事の切り抜きは、テーマ別に表題を付して綴じ糸で製本しているものや各年別に製本したものがあり、高田郡及び吉田町内に関する記事を年別・テーマ別に集約した資料として有用である。

近世文書などの現物も一部収集されているが、高田郡内の基礎資料となりうるものが多い。古文書類の筆写原稿を製本したものも多数含まれているが、例えば、広島藩の地誌である『芸藩通志』のもとになった「国郡志御用ニ付下調べ書出帳」の高田郡内各村の筆写製本が揃っており、その他にも、地域の基礎資料となりうる実に多くの文書を筆写しており、さながら高田郡

¹⁵ 小都氏の資料の一部は、安芸高田市歴史民俗博物館にも寄贈されている。

¹⁶ これらの中には、小都氏が結成した吉田郷土史調査会のほうで調査・収集したものも含まれており、「郷土史調査会」「郡山文庫」などの印が押された資料も含まれている。



写真3 小都勇二資料受入れ時の箱

の一大基礎資料群と評すべき内容である。

小都勇二資料について、内容以外で注目すべきは、その整理された姿にある。小都氏の資料はその多くが、表題を付した封筒・袋などに封入され、もしくは、小都氏自身が冊子体に製本した上で表題

非常に明確なテーマ性をもって入念に整理している点が特徴的である。小都氏は、高田郡の郷土史家として、毛利氏研究のほか、地名・産業経済・医療・学校・寺社・遺跡・文化財・風景・部落・花田植・盆踊など、郡内の実に様々なテーマについて研究・執筆されているが、小都勇二資料の受入時の状態(写真3)からも分かるように、自身が収集・作成した資料も、テーマ別あるいは資料の性格別に箱分けし、箱に表題を付して整理されていた。見た目にも整然と整理された印象の強い文書群であり、資料に対する小都氏の思い入れを伺わせるものであった。

では、その資料に対する小都氏の思い入れとはどのようなものだったのか。氏の研究の一つの集大成でもある『高田郡史』の記述から、その一端を伺うことができる。

小都氏は、『高田郡史』下巻に、地元における資料の残存状況を次のように記している。

明治中期ごろまでは、まだ個人でも克明に記録を書き綴る習慣があり、公の文書なども大切に保存する心掛けがあったため、散逸したといってもまだ資料がたくさん残っていたが、その後明治後期から大正期の記録資料は郡役所の廃止ということもあってか非常に不足であった。(中略)太平洋戦争が熾烈になってからの決戦下の正確な記録は皆無に近かった。「戦争と国民生活」の実態を書き残すことはなにより重要だ

ということを知りながら、焼却されたり棄てられたりしてこれらの資料をさがすのに非常に苦勞をした。

戦後は逆に情報過多で、資料の整理に大変であったというが、小都氏のこの文章からは、郡レベルでの資料の残存が少なく、郷土史研究や郷土の歴史の記録化に支障をきたすことへの懸念が伺える。

この郡史の作業をつづけて感じたことであるが、将来国や県などの機関での編纂は文書館・図書館などで資料が保存されるから容易だろうと思うが、郡・町村などの作業ではとうていできないのではないかと思う。それは資料の保管が多岐にわたっていて、下部団体では不可能であろうと思われるからである。

つまり、国や県と違い、郡や町村レベルでは、資料が特定の機関でまとも保存されていないため、今後の編さん事業は困難を来すであろうと述べている。そして、こうした状況を踏まえ、「わたくしは本稿の脱稿とともに後のちまた郡史を書きつづける人のために、これまでの経験を生かしてこれ以後の資料の整理・保存をはじめている」と述べており、今後の郡史研究や編さん事業のためにも、資料を整理・保存していくのだとしている。

このように見ると、小都勇二資料の受入れ時に見られた箱ごとの整理のされ方も、また資料自体のテーマ・性格別の整理（封入・製本など）のあり方も、後の時代の他者による活用を想定した、小都氏の資料に対する考え方を反映したものと受け止めることができる。このことは、後述する長船友則氏収集資料のあり方とも相通じる重要な点である。

2 鉄道史家・長船友則氏とその資料

次に、鉄道史家・長船友則氏の収集資料を取り上げ、同氏の資料収集のあゆみと資料の概要、及びそこから浮かび上がる地方史研究者収集資料の意義について考察していくことにする。

2-1 鉄道史家・長船友則氏

長船友則氏は、昭和8年(1933)広島県比婆郡西城町(現庄原市)に生まれた。

終戦の翌年、昭和21年(1946)に旧制格致中学に入学。ちょうどその頃、書店で買った『科学と模型』という雑誌の鉄道特輯号を読んだのが、鉄道趣味をもつきっかけになったという¹⁷。昭和28年(1953)、長船氏は大学進学のため広島へ移住。ちょうど学生生活を始めた頃に、東京で鉄道友の会ができ、広島でも同好の人たちが集うようになった。大学卒業後は、昭和31年(1956)7月から約半年間、広島県の広島復興事務所に勤め、翌32年(1957)4月からは大蔵省中国財務局へ勤務することになった。

長船氏が鉄道史家となる転機は、この就職した頃に訪れたという。もともと鉄道に興味があった長船氏が、ある日、鉄道を愛好する先輩の自宅を訪れた際、戦前の時刻表などがずらりと並んでいるのを見て大いに刺激を受け、古い鉄道の歴史を調べてみたいと強く思うようになったそうである。「鉄道史を研究することは、まさに歴史を記録することだと感じた」という¹⁸。

以後、62年(1987)に退職するまでの間、広島市のほか、呉・山口・鳥取・東京(本州四国連絡橋公団)と各地を転勤することになるが、その過程で、研究対象を中国地方に絞り、中国地方の鉄道に関する資料を網羅的かつ精力的に収集し、鉄道史の研究に力を注いでいくことになった。

長船氏の鉄道史に関する著作物は枚挙に暇がない。しかし、世間一般に広く知られる形で発刊された単行本としては、『広電が走る街 今昔』(2005、JTBパブリッシング)が最初である。次いで発刊された『山陽鉄道物語』(2008、JTBパブリッシング)は、長船氏の地道で丹念な資料収集の成果が随所に活かされている点が高く評価され、2009年の鉄道友の会「島秀雄記念優秀著作賞」(単行本部門)を受賞している(写真4)¹⁹。その後、広島県を中心とする中国地方各路線



写真4 長船友則著『山陽鉄道物語』と島秀雄記念優秀著作賞の表彰盾

¹⁷ 長船友則「鉄道趣味」(『中財時報』No221.1972)。

¹⁸ 『日本経済新聞』2013年1月30日(長船友則「広島電鉄100年の軌道を追う 戦禍乗り越えた市電の雄、大車輪の活躍を記録」)。

¹⁹ 島秀雄は、元日本国有鉄道(国鉄)の技師長で、鉄道友の会の初代会長。

をテーマにした著書を相次いで刊行した²⁰。

2-2 長船友則氏収集資料の受入れと資料の概要

長船氏が、広島県立文書館へ資料を寄贈する直接のきっかけは、平成15年（2003）年3月頃に、長船氏が鉄道資料の寄贈について打診したことから始まる。広島県立文書館では、同年度にひろしま文化施設ジョイント事業の一環として、広島平和記念資料館との共同展示「路面電車が語るヒロシマ」を開催するため、5月19日に長船氏宅を訪問し、所蔵資料の展示使用を依頼した²¹。

長船氏から広島県立文書館へ最初に資料が寄贈されたのは、平成16年（2004）10月19日で、広島瓦斯電軌の営業報告書を収録したマイクロフィルムを2本寄贈されたのが最初であった。

以後、追加での資料の寄贈・寄託を重ねていったが、その過程で、長船氏の資料に対する思い入れについても認識させられることとなった。

寄贈受入れを始めた当初、長船氏は「いくら一生懸命集めても、自分が死んだら、後は全て紙屑になってしまうと思うと、集めることが虚しくなってきた」と言われ、適切な機関で一式保存できれば、多くの人に活用してもらうことができ、自分自身も調べたい時にはそこへ行けばよいと話されていた。寄贈・寄託先は長船氏自身が方々へ当たった結果、最終的には、中国地方の鉄道資料を各県で分散保存してもらいよりも、「中国地方の中心県である広島県で一括保存してもらうのが良い」との判断で、広島県立文書館への

²⁰ 長船氏の著作としては、『中国地方鉄道史散策No.1 広島で初めて走った軽便汽車』（1989、編集発行 長船友則）・『中国地方鉄道史散策No.2 岩井軌道の軌跡』（1993、同）があるほか、株式会社ネコ・パブリッシングから、以下の著書を発行している。長船友則『呉市電の軌跡』（2009、RM LIBRARY123）、同『宇品線92年の軌跡』（2012、RM LIBRARY155）、同『可部線 波乱の軌跡』（2017、RM LIBRARY211）、同『三江線88年の軌跡』（2018、RM LIBRARY222）。

このほか、芸備線については、『芸備線米寿の軌跡』（2004、菁文社）で長船氏が執筆協力しており、芸備線の歴史を知る上での必読書である。また、広島電鉄については、『広電が走る街 今昔』のほかに、『原爆被爆前後 広島市内電車運転の推移』（2015、あき書房）がある。本書は、広島路面電車の被爆前から戦後にかけての路線や車両の変遷を丹念に調べてまとめ上げており、広電の歴史を知るための貴重な一書となっている。

²¹ 広島県立文書館では、これ以前にも、平成4年（1992）度の企画展「資料で見る 広島県の鉄道のあゆみ」で長船氏から資料を借用し、展示したことがある（『企画展図録 資料で見る 広島県の鉄道のあゆみ』1994、広島県立文書館）。

寄贈・寄託を決められた。もっとも、長い年月をかけて精魂込めて集めてこられた資料を手放すことは、決して容易なことではなかったはずである。最初に受入れた時刻表・絵葉書・観光案内書類などは“寄贈”であったが、長船氏がとくに力を入れて収集してきた鉄道各路線の関係資料ファイルや一次資料・文献類は“寄託”を希望された。しかし、“寄託”とした資料については、自身が他界した日を寄贈日とする旨を記した寄贈申込書を同時に提出されたのである。

長船氏のこうした手続の踏み方には、自身が収集してきた資料の資料的価値について確たる自信をもち、それらが広く活用されることの意義を感じつつも、それを手放すことへの葛藤を感じることができる。資料の受入れは全て筆者が立ち会ってきたが、長船氏自身が作成したリストと照合しながら1点ずつ資料を確認し、受入れていった。

では次に、「長船友則氏収集資料」の概要を見てみることにする。

資料群の多くを占めるのは、中国地方の鉄道に関する文献資料（書籍・雑誌・資料集など）であるが、とくに利用が多いのは、広島市を中心とする明治期以降の市街地図と時刻表、それに大量の鉄道写真（写真集ファイル及びカードボックス）や絵葉書、各鉄道路線の紙資料をまとめたファイル、新聞スクラップ等である。

地図は、国土地理院などが発行する地形図（約1000点）のほか、中国地方各県の市街地図が約350点ある。このうち広島県内のものが約150点あり、その半分以上を広島市街地図が占める。広島市街地図は明治期から昭和30年代までのものが中心で、これらはとくに利用が見込めるため、デジタル化した後、複写製本を作成し、利用者にはこの製本で閲覧していただいている。

また、時刻表は明治22年（1889）から平成18年（2006）までのもの（欠号を含む）があり、この中には、発行元でも所蔵していないものが含まれている。

絵葉書も1000点以上あり、明治期から昭和戦前期に発行された広島県内の絵葉書が中心であるが、中国地方各県の絵葉書も多く含んでいる。また、希少価値の高い鉄道関係の絵葉書も多数含んでいる（写真5）。

切符ファイルも相当なコレクションであり、中国地方を中心に、昭和初期（明治・大正期を一部含む）から平成までの長期にわたって揃っている。ファイルは20冊ほどであるが、各ファイルに収められている切符の枚数は約5800



写真5 鉄道写真・絵葉書



写真6 鉄道関係資料ファイル

枚にのぼる（ただし、切符は保存対策上の理由により、現物の閲覧は不可）。

鉄道写真については、長船氏自身が撮影した中国地方各鉄道路線の写真プリントとフィルムが大量にあり、ほぼ全ての写真プリントの裏に、撮影年月日と場所・被写体の車両名称などが記入されている。また、フィルムは木製キャビネットに収納し、ネガ台帳を作成して管理されており、台帳をもとにフィルムが出納できるようになっている。

また、各鉄道路線の様々な関係資料（紙資料）を路線ごとにまとめたファイルも多数あり（写真6）、これらを総体として見ると、まさに中国地方に関する第一級の鉄道資料であることが伺える。

なお、長船氏の収集資料は、実際には鉄道関係の単行本や雑誌など、大量の書籍類を含んでいるが、それらは考え方によっては、他の資料群と区別し、¹「図書」扱いにして整理することも考えられなくはない。しかし、注意が必要なのは、それら図書や雑誌類の中に、長船氏が提供した写真や資料が掲載されているもの、あるいは長船氏自身の執筆記事が掲載されているものが含まれている点である。これらは、長船氏が自身の単なる興味関心で購入・収集したものではなく、発行元や執筆者などから寄贈・提供されたもの、あるいは上記のような理由から自身で購入したものであると考えられる。従って、内容を注意深く確認することなく資料群から切り離し、安易に²「図書」扱いにすることは避けなければならない。「長船友則氏収集資料」は、図書類も含め、長船氏の個人文書としての性格を有するものとして考える必要がある。

2-3 資料収集と整理術

さて、以上のような内容を誇る膨大な資料を、長船氏はどのような考えの

もとに収集し、整理してきたのであろうか。

昭和36年(1961)頃、長船氏は、所属する鉄道友の会中国支部が発行する機関誌『しぐなる』の編集を任されることになった。ところが、原稿執筆をするにも、とにかく資料不足に悩まされ、各種資料の収集・整理・保存の必要性を痛感したという。以来、古書店巡りや各種入札会にあししげく通い、中国地方の鉄道に関する紙資料をくまなく収集していったということである。長船氏は、自身の鉄道趣味を紹介した文章の中で、「犬も歩かなければ棒に当たらない」を信条にしていると、たびたび書かれている。

また、資料整理についても、長船氏には明確な考えがあり、自宅で所蔵されていた時から、統一したファイルや製本によって整然と整理された状態で保管されていた。

長船氏の整理方法については、柳澤美樹子『達人に学ぶ鉄道資料整理術』(2003、JTB)の中で詳しく紹介されている。例えば、資料を整理すると嵩が増えるため、家を建てるまでは意識的に整理しなかったらしく、広島市に新居を建てた昭和52年(1977)頃から、本格的に整理に取り組むようになったという。切符は統一したサイズのファイルに年代別・種類別に収納し、開通初日や廃止の最終日など、特別な意味のある切符には、それが分かるように表記した付箋を入れている。

また、長船氏の整理術で特徴的なものとして、新聞スクラップの整理が挙げられる。集めた新聞記事をそれぞれの大きさに応じて台紙に貼り、それらを全てA4サイズにコピーして製本する。コピーが終わった新聞は、若いマニアの人などに譲ったそうで、製本したコピーだけを手元に残す方法をとっている。

散逸しやすい紙資料は、路線別にクリアファイルに入れて整理しているが、年代が記載されていない資料は自分で調べて推定年を記載したり、古い絵葉書は元のセット絵葉書の表題などを鉛筆で薄く記載したりしている。写真の整理については、前述のとおりである。

以上のような収集・整理のあり方は、長船氏の資料収集・整理の目的が、コレクションとして持っていることにあるのではなく、原稿執筆など、活用する点にあることを明確に示すものである。事実、長船氏は同書の中で、「私は資料をコレクションして持っていることが大切なのではなく、それを活用し、さらに写真集、資料集としてまとめたり、原稿などに使う図表、

カットとして利用するのが目的です」と明言している。

ただし、長船氏がここで述べた「活用」とは、必ずしも自身が活用するだけでなく、他者の利用に供することも多分に意識されていたと思われる。そのことは、数多くの鉄道雑誌や単行本等に自身が所蔵する写真や資料を多数提供していることから伺える。広島県立文書館へ鉄道資料一式を寄贈・寄託されたことは、他者による活用や他者への協力を強く意識されていた長船氏の姿勢を象徴する行為であったと言える。

3 歴史記録者としての地方史研究者

ところで、鉄道史家としての長船氏の著作や資料収集のあり方を見ると、歴史研究や資料に対する姿勢に一つの特徴を見いだすことができる。それは、一言で言えば「歴史記録者」としての姿勢であり、それは、青木茂氏や小都勇二氏にも共通して見ることのできる姿勢である。

長船氏の著作からは、「歴史研究者」という以上に「歴史記録者」として、鉄道路線の歴史を「記録」として後世に残すことに何よりも重きを置いていたことが伺える。

「鉄道史を研究することは、まさに歴史を記録することだ」と述べた長船氏の言は、鉄道史研究がその地方・地域そのものの歴史を研究することに匹敵することを述べたものであろうが、さらに筆者なりに理解すれば次のようなことも含意されていたのではないかと考える。

例えば、どの列車がいつからいつまで運行していたか、何番の車両がいつからいつまで在籍し、車番がいつから何番に変わったか、その駅が無人化したのはいつからか、その列車にグリーン車が併結されていたのはいつからいつまでか等々、突き詰めれば突き詰めるほど、鉄道史研究には細かな事実確定をしなければならないことが非常に多い。実際、広島県立文書館でも、鉄道をテーマに展示をすれば、必ずといっていいほど、日付や車番の記載等で観覧者から指摘を受ける。それだけ鉄道史研究には、細かな事実確定を要する事柄が多い。鉄道専門のジャーナル誌などに掲載されている論考などを見ても、その難しさが理解できる。鉄道史を研究することは歴史を記録することだと長船氏が述べた裏には、鉄道史を研究しようとすれば、自ずと細かな史実を間違いなく記録することに多大な労力を費やすことも意識されていたのではないだろうか。

しかし、鉄道史を研究する全ての研究者が長船氏のような手法で研究しているわけではないと思われる。学界で活動する鉄道史研究者は、経済史などの研究史上における位置づけを意識し、オリジナルな論の構築に重きを置くのではないだろうか²²。

長船氏の鉄道史研究は、鉄道路線の歴史について、その関係地域や関連分野（駅、公共施設・機関・学校、ホテル・旅館、料亭、駅弁、人力車、乗合自動車・バスなど）に及ぶ徹底した資料収集を行い、また丹念な取材や調査を重ねて詳細に描くというものである。したがって、長船氏の著作や膨大な収集資料は、いわば“歴史記録者”としての成果と見なすことができる。

ただ、そのように歴史の記録に重きを置き、膨大なコレクションを築いた長船氏でも、自身の資料収集や記録には多大な後悔の念も抱いていたようである。長船氏は、自身の活動を振り返り、次のように記している。

とくに昭和三、四十年代に撮影した写真は、今になってみると大変貴重な記録となり、私にとっては大きな宝となりました。

しかし、正直なところ、私はかなり以前から後悔、後悔…の連続なのです。安物のカメラとはいえ、早くから所持していたにもかかわらず、例えば軀鉄道（昭和二十九年廃止）、尾道鉄道（同三十九年廃止）等…今になって考えてみると、撮影しておくべきだった数多くの風景をほとんど記録してこなかったことが悔やまれてならないのです。

よく考えてみると、世の中の変遷は予想以上に激しく、現在のごく当たり前のありふれた風景、風物でも、これを記録しておけば将来は宝になる（私の存命中は無理としても）かも知れません。

これから先、再び後悔することのないよう、今何を撮影し、何を残すべきかを日頃から考えて行動するよう心掛けています。というのも、これ

²² 長船氏の代表的著書となった『山陽鉄道物語』については、その内容が研究書ではなく読み物になっているとの批評がある（井口泰人「書評『山陽鉄道物語』」、『鉄道史学』第27号、2010）。しかし、この点は出版社側の企画の制約による問題でもあり、本書の最も大きな意義は、従来知られていなかった山陽鉄道の歴史を様々な文献・資料に基づいて丹念に掘り起こした点にあることは、書評でも指摘されるところである。長船氏自身の問題関心としても、記録として残すことに最大限重きを置いており、専門研究書としてまとめることは、必ずしも長船氏の意図ではなかったと思われる。

までの後悔の繰り返しだが、一方では私に積極的に行動するよう鞭打つのです。

昨年は「呉ポートピア」が廃業するというので、最終日は一時間の行列に並び、大観覧車の上から呉線の駅を入れて遊園地全景をカメラに収めました(写真7)²³。



写真7 長船友則氏が撮影した呉ポートピア駅と呉ポートピアランドの全景写真

平成10年(1998)8月31日

長船友則氏収集資料の中には、長船氏が撮影した膨大な量の写真フィルム・プリントがあり、令和の時代にあってはその殆どが貴重な「歴史資料」と言えるものになっている。記録にこだわる長船氏だからこそその「後悔」を吐露したものと言えよう。

長船氏の「後悔」は写真だけではない。雑誌『しぐなる』の編集を担当しはじめた頃、「その気になれば容易に手に入ったであろう戦中戦後の混乱期の資料、とりわけ時刻表、軟式乗車券、各同好会の機関誌などを集めておかなかったことについて大いに後悔」したという。そして、「以来、各書店巡り、同好者の入札参加等による資料集めが始まりました。『犬も歩かなければ棒に当たらない』と悟った次第です」と述べている²⁴。

いま一つ、「歴史記録者」としての長船氏の姿勢を印象づけるものに、2冊の自家製本の寄贈がある。1冊は、『藤井浩三「中国地方の鉄道」著作集』(2016)であり、もう1冊は『補遺版 宇品線92年の軌跡』(2017)である。この2冊は、いずれも長船氏自身が広島県立文書館へ持参し、寄贈したものである²⁵。

前者は、鉄道友の会東中国支部長を務め、同好の先輩である藤井浩三氏

²³ 長船友則「お元気ですか(先輩者だより)」(『中財時報』No.538、1999)。

²⁴ 長船友則「鉄道趣味」(前掲注16)。

²⁵ 『藤井浩三「中国地方の鉄道」著作集』(2016、広島県立文書館所蔵 長船友則氏収集資料、請求番号200407-3024)、『補遺版 宇品線92年の軌跡』(2017、同200407-3025)。

(1915-2006)が執筆した記事を1冊にまとめて製本したものである。長船氏は、本書作成の意図について、「藤井氏が執筆されたのは、主として雑誌、鉄道同好者の発行する会報に掲載されたもので、これらの雑誌等出版物は地元の県市立文書館、図書館では一般に保存、公開していただくことは難しく、貴重な資料として後世に残すことは困難な状況にある。そこで、同氏が雑誌、会報に掲載された記事を『藤井浩三「中国地方の鉄道」著作集』という1冊の本に集約し単行本として纏めれば、公的機関でも保存、公開していただけるのでは」と記している。

また、後者は、長船氏が平成24年(2012)に株式会社ネコ・パブリッシングから発刊した『宇品線92年の軌跡』の補遺版として自家製本したものである。その「はじめに」で長船氏は、頁数の制約から作成原稿のうち3分の1をカットせざるを得なかったとし、「日が経過するにつれて、カット分の貴重な記録をそのまま消し去ることが残念に感じられ、何とか全記録を後世に残すため、ノーカットの『補遺版 宇品線92年の軌跡』を1冊だけ作成し、広島県立文書館で保管、公開しながら後世に残していただきたいと、本書の作成を企画させていただいた。」と記している。公刊された本は13章立てであるが、本書は19章立てであり、また後半は新聞記事や写真・地図・図面などを収録した資料編となっており、本書全体の3分の2を占めている。「せめて今のうちに宇品線の正確な歴史だけでも記録にとどめ残して置きたいとの一念で出来得る限りの記録資料を集めて取り組んだ」という記述からは、長船氏の研究姿勢がよく表れている。

なお、このような「歴史記録者」としての研究姿勢は、先述した青木茂氏や小都勇二氏にも認められるものであり、青木氏の「尾道町年誌」の翻刻掲載にかける熱意や、小都氏の高田郡郷土史研究への熱意も「歴史記録者」としての側面を感じさせるものである²⁶。

²⁶ 小都勇二氏は、『高田郡史』の編さんにおいて、通史だけでなく、民俗編を1巻にあてているが、それは、急速に変わりつつある郷土の暮らしや風習を記録に残すためだとしている。解説の中で小都氏は、本書が研究論文や調査報告書ではなく、「民俗に関する記録や文書をも収録して書いた高田郡の民俗記録集でもある」と記している。とくに暮らしについては、戦前からとっていたノートをもとに、写真や問取図などを補足してまとめ、また吉田の商家については、変貌が著しいため、特に記録したと述べている。郡史を郷土の記録として残そうとする姿勢は、長船氏の鉄道史研究の姿勢とも大いに通じるものがある。

歴史を後世に残すために研究し、そのために役立つ資料をくまなく収集すると共に、自身でも、記録を作成していく。そうして集まった膨大な資料は、その地方・地域の歴史を語るうえで必須の資料となり、大きな価値をもつことになる。各氏の収集・作成資料には、このような共通性を強く認めることができる。

自治体アーカイブズ機関に求められる資料—むすびにかえて—

本稿では、地方史研究者収集資料という範疇のもと、3つの文書群を取り上げ、その資料的意義について、研究者（収集者）の考えや思い入れに注目しながら考察してきた。

自治体アーカイブズ機関にとって核となる資料は、一般的には自治体自身の文書＝公文書と、自治体内に存在する地域資料、中でも近世近代の町村役人・役場や議員など「公職」に関わる家・個人の文書であるが、利用ニーズの観点でみれば、本稿で取り上げたような地方史研究者による収集資料の意義は決して小さくない。むしろ、資料によっては中核的な位置を占めるものも少なくない。

本稿での考察を踏まえ、改めて、自治体アーカイブズ機関にとって必要な資料とは何かを考えた時、地方史研究者収集資料の中に含まれる地図や絵図、写真・絵葉書（画像資料）、地誌・観光案内書類、近世の御用留類を含めた日誌・日記類などは、明らかに中核的な位置を占める資料となる。また、新聞資料については、広島県立文書館でも、地元の主要新聞の複製資料を連年で所蔵開架しているが、小都勇二資料や長船友則氏収集資料に見られる新聞記事の切り抜き製本は、単なる新聞資料とは異なり、特定のテーマ性をもって整理されているため、利用者の利用目的によっては、非常に有用な資料となり得るものである。

本稿での考察に基づけば、自治体アーカイブズ機関にとって利用頻度の高い重要資料がこれら地方史研究者の収集資料に多く含まれる理由は、とりもなおさず、これら研究者の目的とするところが、歴史を後世に伝えるために記録することにある（つまり「歴史記録者」である）からだと言えよう。記録するためには、その元になる資料を意識的に収集することが必要であり、自らも資料作成者となることで、その地方・地域の歴史を記録するための不可欠な資料が集積されることになるのだと考える。

自治体アーカイブズ機関としては、本来的には、単に所蔵者からの申し出を受けて寄贈・寄託を受入れるだけでなく、より「戦略的」に資料を収集していくことも必要であろうが、これら地方史研究者の収集資料は、言わば研究者自身が、その地方・地域のアイデンティティーであるアーカイブズを収集しようとする意識的（「戦略的」）に集めた結果であるため、利用者にとっても必然的に有用性の高い資料となるのではないだろうか。また、逆に、これら資料の内容を検討することによって、自治体アーカイブズ機関にとって、どのような資料を収集することが必要かを学ぶことにもつながるであろう。その意味で、「歴史記録者」としての地方史研究者が、どのような考えのもとにどのような資料を収集したのかを知ることは重要である。

アーカイブズ学は、文書を未来へ継承するための学問であるが、継承するためには、その文書が生み出された経緯や背景を知る必要があり、さらには文書を残した個人または団体の考えを知ることが必要である。アーカイブズ学の本質は、本来そこになければならないと考える。

本稿では、研究者（収集者）の思いや考えについて、文献の「はしがき」や「あとがき」などに記した文章をあえて多く引用して紹介したが、それらは、通常はあまり顧みられることのないものであり、また、文献の中には、現在では入手困難なもの含まれているため、意識的に紹介したものである。そこに記された研究者（収集者）の考えや思いを引き継ぐことも、アーカイブズ機関として重要な使命であると考えている。

（にしむかい こうすけ 総括研究員）